# 京都大学教育研究振興財団助成事業
# 成　果　報　告　書

平成 31年 2月 22日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長　藤　　洋　作　様

所 属 部 局　京都大学大学院医学研究科脳病態生理学講座精神医学教室

職　　名　講師

氏　　名　宮田 淳

| | | |
|---|---|---|
| 助成の種類 | **平成 30年度　・　国際会議開催助成** | |
| 国際会議名 | 国際幻聴研究コンソーシアム2018京都 | |
| 開催期間 | 平成 30年 10月 18日　～　平成 30年 10月 19日 | |
| 開催場所 | 京都大学時計台百周年記念館 | |
| 参加者 | 総 数 71名 | 内 訳 |
| 成果の概要 | **タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料　□ 無　□ 有(　　)** | |

会計報告

| | |
|---|---|
| 事業に要した経費総額 | 6,442,469 円 |
| うち当財団からの助成額 | 1,000,000 円 |
| その他の資金の出所 | (公財)上原記念生命科学財団、公益財団法人 内藤記念科学振興財団、ノバルティス科学振興財団 |

経費の内訳と助成金の使途について

| 費目 | 金額 (円) | 財団助成充当額 (円) |
|---|---|---|
| 会議運営費 | 175,000 | 59,576 |
| 会場費(京都大学時計台) | 459,000 | 459,000 |
| 講演者 謝礼金・交通費 | 211,999 | 211,999 |
| 会議費(プログラム委員交通費・日当) | 150,310 | 0 |
| 委託業務費(印刷費・Web作成費・機材費・施工費・当日運営費ほか) | 5,176,735 | 0 |
| Best Presentation Award | 60,000 | 60,000 |
| 事務局経費(振込み手数料・事務用品ほか) | 209,425 | 209,425 |
| | | |

当財団の助成について

(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)

この度は海外からの参加者が多く、参加者数も直前まで読めませんでしたので収入面で
貴財団のお力を借りられたことで大変助かりました。
この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

# 成果の概要 / 宮田　淳

## １．概要

成果報告書に記載の通り、平成 30 年 10 月 18 日・19 日の両日、京都大学百周年時計台記念館において、International Consortium on Hallucination Research 2018 Kyoto（国際幻聴研究コンソーシアム 2018 京都）を開催した。大会中、2 つの Keynote lecture、3 つのシンポジウム、1 つの Oral session、および 2 つのポスターセッションを行った。

## ２．Keynote lecture

1 日目の Keynote lecture では、リール大学の Renaud Jardri 教授が、幻聴に関する MRI 研究の最近の状況を概説した上で、彼らの最新の研究を紹介した。また幻聴に関する Circular inference model による研究結果を紹介した。

2 日目の Keynote lecture では、Institut de Neurosciences de la Timone の Pascal Belin 教授が、彼の記念碑的研究である「Auditory voice area」の研究と、その後の「内的言語」に関する一連の研究を紹介した。

## ３．シンポジウム

1 日目のシンポジウム 1「幻聴の神経生理学」では、4 人のスピーカーから、脳波や機能的 MRI を用いた研究成果に関する話題が提供された。

九州大学の平野羊嗣講師は、脳波を用いた研究で、脳波における Oscillation と幻聴との関係について講演された。

本大会の副大会長である、日本医科大学の肥田道彦講師からは、音声認知および幻聴に関する機能的 MRI 研究の成果について報告がなされた。

University of New South Wales の Thomas Whitford 教授からは、内的言語（Inner speech）と幻聴の関係についての神経生理学的研究の報告がなされた。

University of California, San Francisco の Daniel Mathalon 教授は、発声時における Corollary discharge の異常と幻聴との関係に関する研究と、Corollary discharge と妄想などの他の精神病症状との関係について講演された。

2 日目のシンポジウム 2「幻聴と妄想」では、4 人のスピーカーから、幻聴と妄

想の神経基盤の異同についての発表がなされた。
University of British Columbia の Todd Woodward 教授は、機能的 MRI を用いた研究で、幻聴と妄想の神経基盤の違いについて講演された。
本大会の大会長である、京都大学の宮田淳講師（報告者）は、安静時機能的 MRI を用いた研究により、幻聴と妄想に共通する神経基盤として、Salience の異常があることを報告した。
法医学研究所の高畑圭輔研究員は、老年期精神病におけるタウ神経病理について、PET を用いた報告を行った。
Yale 大学の Philip Corlett 教授は、幻聴に関する計算論モデルを用いた一連の研究結果を報告した。

3 日目のシンポジウム 3「治療とリカバリー」では、心理学的・薬理学的治療の現状、患者さんから見た幻聴の体験とリカバリーの意味、および睡眠と幻聴の関係について報告がなされた。
Dongguk University の Yong-Sik Kim 教授は、治療抵抗性の幻聴に対する薬物治療について報告した。
Hearing Voices Network Japan の佐藤和喜雄代表は、幻聴を抱える患者さん達自信の体験と、Hearing Voices Network の活動について報告された。
King's College London の Emmanuelle Peters 教授は、幻聴に対する心理学的治療法である Cognitive Behavior Therapy for Psychosis（CBTp）について講演した。

４．Oral session
若手研究者を中心に、9 題の発表があった。演題は幻聴体験の文化的背景、疫学的研究から脳画像研究、マウスモデルによる生物学的研究まで、バラエティに富んでいた。

５．ポスターセッション
若手研究者を中心に、21 題の発表があった。疫学研究、文化差の研究、計算論的アプローチによる研究、脳画像研究など多岐にわたり、いずれもポスター前で熱い議論が戦わされた。

６．その他

Oral session およびポスターセッションの中から、若手の優秀演題それぞれ 1 題ずつを表彰した。

ICHR は例年 100-150 人が集まる学会であるが、今回は日本開催であったためか、事前のアナウンスに力を入れたにもかかわらず、参加者は約 70 人にとどまった。しかし欧米だけで無く、中東や東南アジアも含め 15 カ国から参加があり、ICHR の今後の国際的な発展の第 1 歩として、非常に有意義な大会であった。人数が例年より少なかった分、参加者からは非常に密にディスカッションすることが出来た、と好評を得た。

７．最後に

助成をいただけたことで、無事大会を開催出来ました。誠にありがとうございました。